

目次

序章 洪沢栄一が求めたもの

1

1 論語と算盤を一致させる 1

2 経済士道の実践 5

3 よき企業者のあり方 9

第1章 道德経済合一説 「論語と算盤」の真意

17

1 道德と経済の両立とは 17

(1) 道德と経済は両立できる——バランスではなく合一 17

(2) 二つの道德、二つの経済 22

(3) 合一説の論理構造 23

2 道德なくして経済なし 28

第2章	公益と私利をめぐる	道德経済合一説のエッセンス	61
1	公益追求の意図——アダム・スミスの思想との比較	61
	(1) 正しい自利心の是認——両者の共通点	61
	求という「義務」——両者の相違点	65	
	(3) 私利追求に勝		
	るとも劣らぬ公益追求	70	
3	経済なくして道德なし	38
	(1) 博施濟衆——渋沢にとっての究極の道德	38	
	(2) 公益		
	の追求——民の使命として	43	
	(3) 私利よく公益を生ず		
46			
4	合一説についての留意点	48
	(1) 合一説の大前提——富の正当性	48	
	(2) 積極的／消極		
	的道德と経済との組み合わせ	51	
	(3) 一致させる必要	53	

第3章 先義後利 合一させる要訣

2	公益は手段か目的か——マイケル・E・ポーターのCSVとの比較	73
(1)	公益の意図的な追求——両者の共通点	73
(2)	事業活動の「目的」としての公益——両者の相違点	76
(3)	公益への責任的アプローチ	80
3	公益第一・私利第二	85
(1)	道徳経済合一説のエッセンス	85
(2)	よき企業者の経営哲学	88
1	義が先で利が後	103
(1)	道徳経済(義利)合一の要訣	103
(2)	先義後利という言葉	110
2	義と利について	111
(1)	義とは	111
(2)	利とは	116

第4章 経済士道 実業道即ち士道

3	規範と真理——先義後利の二つの意味	118
	(1) 利よりも義を重んじる——規範としての先義後利	119
	(2) 義を行えば利はついてくる——真理としての先義後利	124
4	努力と犠牲——後利をめぐつて	128
	(1) 真理であつても努力を要す	128
	(2) 規範のゆえに犠牲を要す	131
1	実業と武士道	157
	(1) 士魂商才?	157
	(2) 実業道即ち武士道	164
2	先義後利の経済士道	169
	(1) 経済士道とは	169
	(2) 経済騎士道、産業の指揮官	176
3	現代の士道としての経済士道	184
	(1) 「俸禄」をあてにできない現代の我々	184
	(2) 「忠臣は	184

二君に事えず」 187 (3) 克己——先義と後利の組み合わせ
 によるダイナミズム 190 (4) 「功利追求の現場から生まれ
 た反功利主義の思想」 193

第5章 三つの義 公への奉仕、誠実、勇氣

1	経済士道の三つの義	205
2	公への奉仕	209
	(1) 企業は社会の公器	209
	(2) 事業活動を通じた公への奉仕	218
	(3) 公私の入れ籠構造	218
3	誠実	221
	(1) 二つの誠実	221
	(2) 真心	223
	(3) 正直	225
4	勇氣	232
	(1) する勇氣	233
	(2) ししない勇氣	237

1	私利即公益	253
	(1) 「私利公益の区別は間違い」	253
	くの私利」	256	
	(2) 「真の私利」と「全	253
2	実業界の王道を	261
	(1) 経営哲学と経営理念	261	
	(2) 「実業界の霸道は悪くはな	261
	い」	266	
	(3) 「しかしどうか王道を」	272	
3	ESG／SDGs 推進の王道と霸道	277
	(1) 洪沢はESG／SDGsの先駆者か？	277	
	(2) 主たる	277
	動機は何か	281	
	(3) 責任をもってESG／SDGsに取り	277
	組む	283	
4	コーポレート・ガバナンスと経営者の責任	288
	(1) 経営者に求められる「誠実」	288	
	(2) コーポレート・ガ	288
	バナンスという霸道——「誠実」と「勇気」をめぐって	291	

(3) 「責任のアウトソーシング」という無責任 297
営の本質は責任にはかならない」 300
(4) 「経

終章 経済士道を生きる

313

1 資本主義再生のための第二の道 …… 313

(1) 資本主義と伝統的／戦略的CSRの限界 313
(2) 公益

第一・私利第二で見えざる手を助ける 318

2 経済士道の社会的可能性 …… 323

(1) 思想としての普遍性 323
(2) 実践普及のポテンシャル

328 (3) 経済士道の拡充 330

3 よき企業者の生き方としての経済士道 …… 335

参考文献

353

あとがき

365

凡例

1 原則として、原典における旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いにそれぞれ改め、必要に応じて句読点を補った。また、適宜、漢字を仮名に改めるとともに、難読文字にはルビを付した。

2 ()内は、引用者による補足的説明である。

序

章 洪沢栄一が求めたもの

1 論語と算盤を一致させる

日本資本主義の父と言われる実業家・洪沢栄一が、「論語と算盤」そろばんを唱えたことはよく知られている。経済活動における「論語Ⅱ道徳」と「算盤Ⅱ経済」との両立を説く洪沢のこの考え方を「道徳経済合一説」とも言う。本書は、①洪沢が唱道した道徳経済合一説の真意を読み解き、それをもとに②洪沢が求めた、現代にも通じる「よき企業者」のあり方を明らかにしようとするものである。本書の標題・副題にある「先義後利」せんぎこうりと「経済士道」が、その「あり方」を端的に示すキーワードである。

道徳経済合一説の真意を読み解くなどと言うと、何を今さらと思われるかもしれない。道徳経済合一説はすでに多くの書籍や記事で紹介されているし、その原典とも言うべき洪沢の代表作『論語

と算盤』を読まれた人も少なくないだろう。経済活動において、経済だけでもなく、また道德だけでもなく、その両方を追求するという、道德経済合一説に関する基本的な理解は、多くの人がすでお持ちだと思う。しかしこれだけでは、洪沢の考えを表層的にしからず理解したことにならない。

表層的な理解で道德経済合一を論じるときに生まれる、典型的な誤解が二つある。一つは、道德と経済を「バランスさせる」ことによつて両方を追求する、という誤解（バランスの誤解）。もう一つは、道德と経済の両方を追求しさえすれば「どちらを優先するかは問わない」という誤解（無差別の誤解）。これらの誤解に基づいて、洪沢の道德経済合一説の解説がなされたり、社会的課題に直面する今日の企業経営に対する「論語と算盤」の示唆が論じられたりすることが、しばしばある。

誤解というなら、真意は何か。「道德と経済をバランスさせる」のではなく、「道德と経済は本質的に一致する」というのが洪沢の主張である。ただし、本質的に一致するからといって、放つておけば自然にそうなるわけではない。経済活動に関わる当事者が、一致させなければならぬ。その際、「道德と経済のどちらを優先しても構わない」というのでは、一時的にはともかく持続的な一致は望めない。道德と経済を一致させるための要訣は「道德（義）を經濟（利）に優先させる」ことである。これこそ洪沢が説いてやまないことであつた。要するに論語と算盤は、両者のバランスを取るのではなく、論語を算盤に優先させることによつて一致させる——それあつての論語と算盤の両立、道德経済合一なのである。

こうした洪沢の思想の本質を喝破した経営者もいる。その一人が、コマツの社長・会長を務めた安崎暁あんざきあきとるであった。公益財団法人洪沢栄一記念財団が毎年行っている催しに「論語とそろばん」セミナーがある。安崎は二〇一七年のこのセミナーでゲストに招かれ、インタビューを受けた。そのとき司会者が次のような投げかけをした。

「(……) いろんな方にインタビューをしていくと、『論語と算盤』というのは、一緒にするのはすごく難しいし、バランスを取るのも難しい」という言い方をする方がすごく多いのです。それはどうしても競争が厳しくなってしまうと、『論語』とか言っていられなくなり、金勘定のほうに重点を置かざるを得なくなってしまうところから来るようなのですが……」

安崎はこれに次のように応じた。

「そういう人は社長にならない方がいい。競争に勝つのは、最後はやっぱり利益じゃなくて倫理だということがわかる人のほうが本物だろうと思う。バランスを取るといふ考え方がそもそもちょっとおかしい。『論語』という倫理のほう利益よりやっぱり上だし、そちらの方が大事でしょう。両方が大事で『時によってこう』『時によってはこう』というのではなくて、常に倫理

が上であって、その中で時代に合った形でやっていくというのが正解だと思えます。だから、『両立しない』と言っている人は両立できないだけの話で、両立している人は世の中に結構いっぱいいるんじゃないですかね¹」

論語と算盤はバランスを取るものではなく、常に算盤よりも論語の方を重視し、その中で競争に勝ち、利益を出して両立させるものである——洪沢の道徳経済合一説のまさに正鵠を射た発言である²。本書でこれから述べようとしていることのいわば骨格は、安崎のこの発言に尽きると言ってもよい。

本書の前半（第1～3章）は、この骨格を洪沢自身による数々の発言（や行動）に即して描き出すようにするものである。

第1章では、道徳経済合一という洪沢の主張が正確には何を意味するのかを、その論拠を示しつつ解き明かす。一言でいえば、「道徳なくして経済なし、経済なくして道徳なし、ゆえに道徳と経済は一致する」。これが道徳経済合一説の論理構造である。

第2章では他の類似思想（アダム・スミスの所説とマイケル・ポーターらの所説）との比較を通じて、洪沢の合一説のエッセンスを抽出する。そのエッセンスとは「公益第一・私利第二」である。洪沢にとって、道徳の最大の眼目は「公益の追求」（『論語』で言われる博施濟衆^{はくしさいしゆう}）博く民に施してよく衆を

濟^すう)であつて、これはそれ自体を意図して行^なうべき經濟活動の目的であり、私利獲得の手段ではない。私利はその意味で「第二」である。ただし「第二」は「二の次↓どうでもよい」ということではない。公益に次いで二番目に大切なのが私利だ、という意味である。私利軽視では決してない。

第3章では、公益第一・私利第二を、「先義後利」というより広義でかつ簡潔な表現に拡張し、その意味合いを討究する。先義後利こそ道徳(義)と經濟(利)を合一させるための要訣であり、洪沢が求めたことである。これが本書全体を貫く鍵概念である。經濟活動において義を先にして、利を後にする——私利第二がそうであつたように「利を後にする」というのは、「利を顧みない」とか「利を捨てる」という意味ではない。利も大切だが、それよりもなお義の方を大切にするのである。『孟子』や『荀子』に由来する先義後利について、本章では「利よりも義を重んじる」という「規範」としての意味合いと、「義を行えば利はついてくる」という「真理」としての意味合いとに着目し、道徳經濟合一の観点からこれを検討することになる。

2 經濟士道の実践

本書の後半(第4章以降)では、以上のような洪沢の道徳經濟合一思想の骨格——先義後利を旨として道徳と經濟を合一させる——に肉付けをしていく。

事をなすのに義を重んじるのをその核心にもつ思想として、日本の武士道は代表的なものと言えよう。洪沢は『論語と算盤』の中で「武士道は即ち実業道なり」「想うにこの武士道は、啻に儒者とか武士とかいう側の人々においてのみ行うものではなく、文明国における商工業者の、拠りてもつて立つべき道も、ここに存在することと考える」と述べている³。先義後利で経済活動を行うという実業家、商工業者のゆくべき道は、武士のゆくべき道としての武士道と相通じる、というわけである。それゆえ、「今や武士道は移してもつて、実業道とするがよい」と洪沢は言う⁴。

洪沢のこうした主張に着目し、「論語と算盤の両立」という実業家のあり方を「経済士道」という概念で捉え直すのが、第4章である。経済士道とは、先義後利で経済活動を行う道、それによって道徳と経済を合一させる道である。「論語と算盤」「道徳経済合一」は洪沢自身が使った言葉だが、「経済士道」はそうではない。「武士道即実業道」という洪沢の一連の主張に基づいて、本書で筆者が命名し、洪沢の思想の核心をわかりやすく伝える概念として提唱するものである。

敢えてこのようなことをするのは理由がある。「論語と算盤」「道徳経済合一」だけでは、冒頭に述べた「バランスの誤解」や「無差別の誤解」が生じがちで、それでは洪沢の真意が伝わらないことが危惧されるからである。洪沢は、「道徳も経済もほどほどにバランスを取って両立させましょう」とか「状況が悪いときには利益優先でも構いません」とは言っていないし、「企業が儲けるために、社会課題の解決を絶好の手段として利用しましょう」と呼びかけたわけでもない。しかし

誤解が流布している限り、そうした似て非なる「論語と算盤」があたかも洪沢のお墨付きだと思われてしまう。

洪沢の真意を正確に受け継ぎ、伝えるためには、「論語と算盤」「道德経済合一」と言うにとどまらず、先義後利によって合一を実現させる、というところまで議論を進めてこれを明確に打ち出さねばならない。「経済士道」はそのために提唱するものである。

第4章では、この「経済士道」という概念の導入を行う。その上で、それがトーマス・カーライルのいう「産業の指揮官 (Captains of Industry)」やアルフレッド・マーシャルのいう「経済騎士道 (Economic Chivalry)」との間にもつ共通性を指摘する。さらに、本来、利を嫌った武士の道を、利の追求と不可分である実業の道に適用することの妥当性と意義についても考察する。

続く第5章では、経済士道を実践するとは具体的にはどういうことかを明らかにすべく、経済士道において利よりも重んじられるところの「義」とは何かを論じる。洪沢の所説も踏まえつつ、(少なくとも本書では)「公への奉仕」「誠実」「勇氣」の三つを経済士道の「義」と位置づける。この三つは武士道倫理にも相通じることはいうまでもない。

先の「公益第一・私利第二」は、義を「公への奉仕」と捉えたときの先義後利の謂である。社会の公器たる企業の事業活動を通じて、企業者(本書においてこの言葉は企業家や経営者のみならず、企業で働くあらゆる者を指す。次節で詳述する)は様々な形で多様なステークホルダーに貢献する。その使

命に取り組むことが公への奉仕である。一方、「他者のために純粋な動機に基づいて全力を尽くす」という真心と、「虚言を為さない」「言を成す」という正直とを貫くのが「誠実」である。そして企業者が公への奉仕と誠実を実践し、その実践に徹する上で必要な心的態度が「勇氣」である。洪沢は勇氣について「なかならず事業界に携わる者において、その必要性が甚だ多い」と言っている。

これらの義に関して先義後利で経済活動に臨むのが経済士道である。そうであれば、次のような振る舞いは経済士道に反することになる。①自分が一儲けするための手段として「公への奉仕」に精を出す、②自分の地位や評判を保ち、高めることを狙って「誠実」に振る舞う、③「勇氣」を奮うことなしに、単に成功報酬を目当てに取るべきリスクを取る。

ところが近年のESG/SDGs経営の推進やコーポレート・ガバナンス改革は、このような経済士道に悖る振る舞い、つまり洪沢の「論語と算盤」とは本来相容れない行き方を説き、求めているように見受けられる。しかも例の誤解に基づいて、それがあたかも洪沢の「論語と算盤」に適用かのように考えられ、論じられることさえある。この問題に焦点を当て、ESG/SDGs経営の推進とコーポレート・ガバナンス改革が、洪沢が真に求めた企業者のあり方とはいかなる意味で相容れないのかを第6章の後半で考察する。

ここでは「責任」がキーワードになる。ピーター・ドラッカーが洪沢を「世界のだれよりも早く、経営の本質は『責任』にほかならないということを見抜いていた」と評したように、洪沢の経営思

想は責任によって特徴づけられる。責任ある経営に不可欠なのが、先義後利の経営士道である。経営における責任という事で言えば、今日、ESG/SDGs経営もコーポレート・ガバナンスも企業や企業者の責任と深く関わっていることは論をまたない。しかし現状は、その責任の問題が損得の問題に置き換えられてしまっている。ESG/SDGs経営の推進もコーポレート・ガバナンス改革も、利を先にすることで義を実現しようという、いわば「先利後義」の発想が支配的になっている。この発想による限り、責任ある経営は期待できないであろう。

3 よき企業者のあり方

義を第一にして利は第二にするのが洪沢の信条であった。しかしだからといって、洪沢は義よりも利を第一にする実業家を、利を第一にしているからという理由だけで批判したり拒絶したりすることはなかった。むしろそうした人たちとも手を携えて、日本の経済・産業の発展を図ろうとした。洪沢は、公益を第一とする経営を「実業界の王道」、私利を第一とするそれを「実業界の霸道」と呼び、結果として公益が増進されるならば「実業界における霸道は決して悪くはない」とさえ述べている。そうであれば、先に述べた現在のESG/SDGs経営の推進やコーポレート・ガバナンス改革を、じつは洪沢も（全面的には言わないまでも）許容するであろう。

しかしこの発言に続けて洪沢はこう言っている。「しかし真正の実業家に望む処は、どうぞ私はこの王道を以て事業を經營するにあれかしと思うのでございます」。公益の増進は私利第一を動機とする覇道でも得られるだろうけれども、本物の実業家には、公益第一を動機とする王道の經營によつて、これを主体的に実現させてほしい、というのである（第6章の前半で、この辺りの議論が展開される）。

先義後利の經濟士道を実践して実業界の王道を歩むこと——これが洪沢の求めたことであつた。本書の副題に掲げたこの「求める」という言葉には、①価値あるものとして追求する、②希望を相手に伝えてその実現を期待する、という二つの意味が込められている。洪沢はこの道を自ら求めた①と共に、「本物の実業家」（たらんとする人々）に対しても求めた②のである。

洪沢自身も含めた「本物の実業家」は先義後利で經濟活動にあたる。先に引用した安崎の「競争に勝つのは、最後はやっぱり利益じゃなくて倫理だということがわかる人のほうが本物だろうと思う」という発言も併せて想起したい。

本書では「本物の実業家」の代わりに「よき企業者」という言葉を使うことにする。

「企業者」は、普通、アントレプレナー（entrepreneur）の訳語として「企業家」と同義で使われている。新しく企業を立ち上げるにせよ、既存企業の中で行うにせよ、「現在コントロールしている經營資源にとらわれることなく、新しいビジネス機会を追求する人」¹⁰がアントレプレナーであり、

イノベーションの担い手である。それゆえアントレプレナーは、経常的なビジネスの管理にあたるマネジャーとは（少なくとも概念上は）区別される。

しかし本書で言うところの「企業者」は、もちろんアントレプレナーも含むが、そのみを指すのではない。社長をはじめとするトップマネジメント（経営者）も、部課長クラスのみドルマネジャーも含む。それどころか、マネジャーの下で働く担当者・現場レベルの従業員をも含んでいる。つまり企業で働く者すべてを指して「企業者」と呼ぶのである。¹¹ 道德と経済の両立が、アントレプレナーやトップマネジメントにとつてとりわけ重要な課題であることは間違いない。とはいえ、経済活動に企業という場を通じて従事する限り、道德と経済の両立は誰もが直面する課題のほうである。したがって、両立の要訣である先義後利の経済士道もまた、企業経営において主導的立場にいる人たちはもちろんのこと、そこで働くあらゆる当事者すなわち「企業者」に関わる。

では、よき企業者の「よき」「よい」とはどういうことか。経営学者の加護野忠男は、経営学を「よいことを上手に成し遂げる方法を探求する学問」と定義している。¹² この表現を転用して、「経営に求められるのは『よいことを上手に成し遂げる』ことだ」と言うこともできよう。例えば、顧客や社会に役立つ製品・サービスを提供するのは「よいこと」、それを利益が出るように効率的に行うのは「上手に成し遂げる」ことである。いくら「よいこと」でも「下手に」やる（非効率で赤字が出る）のでは拙劣な経営になるし、「悪いこと」（例えば欠陥のある製品をそうと知りながら売る）

を「上手に成し遂げる」とすれば悪質な経営である。「よいこと」と「上手に」は、真正の経営に不可欠な二つの要素である。

この不可欠な二要素にもう一つの要素を加えたい。それは「立派に」ということである。議論を先取りするなら、「よいこと」を立派にする企業者」のことを「よき企業者」と呼ぶのである。

一口に「よいことを上手にする」といつても、それを「立派に」するのとそうでないのがある。例えば、温暖化ガス削減に役立つ事業に取り組み、その事業が高い収益性を実現しているとしよう。これは「よいこと」を「上手に」しているわけだが、その場合、①地球温暖化を憂え、温暖化ガス削減に一企業（者）として強い使命感・責任感をもって取り組む企業（者）もあれば、②温暖化ガス削減ビジネスを（建前はともかく本音としては）もっぱら「絶好の収益機会」と考えて精を出す企業（者）もあるだろう。自己本位の②と比べて、①のこの事業への取り組み方は「立派」である。

一般に、「顧客や社会に役立つ製品・サービスの提供」を「利益が出るように効率的に」行っている、①本当に顧客や社会のためを念じて利他の精神を重んじてそうするのと、②自分が儲けるための便宜として利己的にそうするのとは違いがある。「正直な商売」（という、よいことを）を効率的に行っている、①正直さそのものを信条としてそうするのと、②評判を高めたがために正直（であるかのよう）に振る舞うのとは違いがある。「リスクをとって必要な投資をする」のでも、①責任感と勇気を梃子にそうするのと、②個人的な成功報酬に誘われてそうするのとは違いがあ

参考文献

- 赤塚忠 [1967] 『新釈漢文大系 第二卷 大学・中庸』 明治書院。
- アリストテレス [2002] 『ニコマコス倫理学』（朴一功訳） 京都大学学術出版会。
- 安崎暁・西藤輝・渡辺智子 [2010] 『日本型ハイブリッド経営―二世紀経営者の役割―』 中央経済社。
- M・アンダーソン&P・エッシャー [2011] 『MBAの誓い―ハーバード・ビジネス・スクールから始まる若きビジネス・リーダーたちの誓い―』（青木創訳・岩瀬大輔監訳） アメリカン・ブック&シネマ／英治出版。
- 伊丹敬之 [2007] 『よき経営者の姿』 日本経済新聞出版社。
- 伊丹敬之 [2010] 『ミネルヴァ日本評伝選 本田宗一郎―やってみても、何がわかる―』 ミネルヴァ書房。
- 伊丹敬之 [2020] 『経営の知的思考 直感で発想 論理で検証 哲学で跳躍』 東洋経済新報社。
- 伊丹敬之 [2024] 『経営理念が現場の心に火をつける』 日経B P 日本経済新聞出版。
- 伊丹敬之・加護野忠男 [2022] 『ゼミナール経営学入門 新装版』 日経B P 日本経済新聞出版本部。
- 出光佐三 [1971] 『日本人にかえれ』 ダイヤモンド社。
- 稲盛和夫 [2004a] 『新装版』 『心を高める、経営を伸ばす―素晴らしい人生をおくるために―』 P H P 研究所。
- 稲盛和夫 [2004b] 『生き方―人間として一番大切なこと―』 サンマーク出版。
- 稲盛和夫 [2010] 『ど真剣に生きる』（生活人新書） N H K 出版。
- 稲盛和夫 [2012] 『新版・敬天愛人 ゼロからの挑戦』 P H P ビジネス新書。
- 稲盛和夫 [2014] 『京セラフィロソフィ』 サンマーク出版。
- 稲盛和夫 [2015a] 『経営者に求められる人間性』（盛和塾神戸塾長例会講話、一九九〇年二月一九日） 稲盛和夫

著・京セラ株式会社編『稲盛和夫経営講話選集 第二巻 私心なき経営哲学』ダイヤモンド社。

稲盛和夫 [2015b] 「なぜ経営に『利他の心』が必要なのか」立命館大学稲盛経営哲学研究センター開設記念講演講話録（二〇一五年六月二五日 立命館大学大阪いばらきキャンパス）。http://www.ritsumei.ac.jp/research/arch/riprc/common/file/pdf/news/150605_kaisetsukinen.pdf

稲盛和夫 [2016a] 「われわれが目指すべき商人道」（第一一回盛和塾全国大会講話、二〇〇三年八月二二日）稲盛和夫著・京セラ株式会社編『稲盛和夫経営講話選集 第五巻 リーダーのあるべき姿』ダイヤモンド社。

稲盛和夫 [2016b] 「徳に基づく経営」（中日経営者交流フォーラム―調和を目指す企業建設―、二〇〇七年七月五日）稲盛和夫著・京セラ株式会社編『稲盛和夫経営講話選集 第五巻 リーダーのあるべき姿』ダイヤモンド社。

稲盛和夫 [2016c] 「人と企業を成長発展に導くもの―日本航空再建の真の要因と日本経済の再生について―」（第二〇回盛和塾世界大会講話、二〇二二年七月一九日）稲盛和夫著・京セラ株式会社編『稲盛和夫経営講話選集 第六巻 企業経営の要諦』ダイヤモンド社。

稲盛和夫 [2022] 『経営12カ条―経営者として貫くべきこと―』日経BP 日本経済新聞出版。

井上潤 [2020] 『渋沢栄一伝―道義に欠けず、正義に外れず―』ミネルヴァ書房。

今道友信 [1973] 『美について』講談社現代新書。

今道友信 [1990] 『エコエティカ―生圏倫理学入門―』講談社学術文庫。

今道友信 [2010] 『今道友信 わが哲学を語る―今、私達は何をなすべきか―』（佐藤孝雄・池田雅之編）かまくら春秋社。

岩井克人 [2005] 『会社はだれのものか』平凡社。

岩井克人 [2009] 『会社はこれからどうなるのか』平凡社ライブラリー。

- 于臣 [2008] 『渋沢栄一と〈義利〉思想―近代東アジアの実業と教育―』ペリカン社。
- 宇同 [1977] 『中国哲学問題史 下冊』（澤田多喜男訳）八千代出版。
- 内野熊一郎 [1962] 『新釈漢文大系 第四卷 孟子』明治書院。
- 内村鑑三 [2005] 『孟子を読む』『内村鑑三信仰著作全集 第二卷』教文館。
- 内村鑑三 [1995] 『代表的日本人』（鈴木範久訳）岩波文庫。
- 宇野精一 [2019] 『孟子 全訳注』講談社学術文庫。
- 大島晃訳 [1983] 『中国の古典 4 孟子』学習研究社。
- 太田嘉仁 [2018] 『JALの奇跡―稲盛和夫の善き思いがもたらしたもの―』致知出版社。
- 大西康之 [2013] 『稲盛和夫 最後の闘い―JAL再生にかけた経営者人生―』日本経済新聞出版社。
- 小倉昌男 [1999] 『小倉昌男 経営学』日経BP社。
- 小竹武夫訳 [1978] 『漢書 中巻』筑摩書房。
- 加護野忠男 [2014] 『経営はだれのものか―協働する株主による企業統治再生―』日本経済新聞出版社。
- 加護野忠男 [2010] 『経営の精神―我々が捨ててしまったものは何か―』生産性出版。
- 加護野忠男編著 [2016] 『日本の企業家 2 松下幸之助―理念を語り続けた戦略的経営者―』PHP研究所。
- 笠谷和比古 [2017] 『武士道の精神史』ちくま新書。
- 加地伸行 [2009] 『論語 増補版』講談社学術文庫。
- 鹿島茂 [2011] 『渋沢栄一 I 算盤篇』文藝春秋。
- 金谷治訳注 [1961] 『荀子（上）』岩波文庫。
- 金谷治訳注 [1999] 『論語』岩波文庫。
- 菅野覚明 [2006] 『武士道に学ぶ』日本武道館。

- 菅野覚明 [2009] 『日本の元徳』 日本武道館。
- 菅野覚明 [2019] 『本当の武士道とは何か―日本人の理想と倫理―』 P H P 新書。
- 菅野覚明、栗原剛、木澤景、菅原令子訳・注・校訂 [2017] 『新校訂 葉隠(上)』 講談社学術文庫。
- 簡野道明 [1931] 『論語解義』 明治書院。
- 木村昌人 [2021] 「なぜ世界中で『渋沢栄一』が研究されているのか―渋沢の資本主義思想『合本主義』の今日的意義―」 東洋経済オンライン 六月一六日。
- 小池喜明 [1999] 『葉隠―武士と「奉公」―』 講談社学術文庫。
- 國分功一郎 [2021] 「中動態から考える利他―責任と帰責性―」 伊藤亜紗・中島岳志・若松英輔・國分功一郎・磯崎憲一郎 『利他』とは何か』 集英社新書。
- 小林秀雄 [1974] 『考へるヒント』 文春文庫。
- A・コント＝スポンヴィル [2006] 『資本主義に徳はあるか』 (小須田健／コリーヌ・カンタン訳) 紀伊國屋書店。
- 坂本慎一 [2002] 『渋沢栄一の経世済民思想』 日本経済評論社。
- 相良亨 [1980] 『誠実と日本人』 ベリかん社。
- 相良亨 [2010] 『武士道』 講談社学術文庫。
- 佐々木毅・金泰昌編 [2001] 『公と私の思想史 公共哲学1』 東京大学出版会。
- 笹倉一広 [2011] 『渋沢栄一『論語講義』の書誌学的考察』 『言語文化』 第四八巻、一二七―一四五頁。
- 笹倉一広 [2012] 『渋沢栄一『論語講義』原稿劄記(1)』 『言語文化』 第四九巻、一〇九―一二八頁。
- 笹倉一広 [2013] 『渋沢栄一『論語講義』原稿劄記(2)』 学而第一 一―一〇章 『言語文化』 第五〇巻、九七―一一〇頁。

M・サンデル [2010] 『これからの「正義」の話をしよう——いまを生き延びるための哲学——』（鬼澤忍訳）早川書房。

洪沢栄一 [1918] 『道徳と経済』『竜門雑誌』第三五六号。

洪沢栄一 [1922] 『実験論語処世談』実業之世界社。

洪沢栄一 [1926] 『青淵百話 再版』同文館。

洪沢栄一 [1928] 『青淵先生訓話集』竜門社。

洪沢栄一 [1957] 『立会略則』明治文化研究会編『明治文化全集第一二巻 経済編（改版）』日本評論新社。

洪沢栄一 [1975] 『論語講義 新版』明徳出版社。

洪沢栄一 [2008] 『論語と算盤』角川ソフィア文庫。

洪沢栄一 [2010] 『洪沢百訓——論語・人生・経営——』角川ソフィア文庫。

公益財団法人洪沢栄一記念財団編 [2012] 『洪沢栄一を知る事典』東京堂出版。

洪沢青淵記念財団竜門社編 [1955] 『洪沢栄一伝記資料 第四巻』洪沢栄一伝記資料刊行会。

洪沢青淵記念財団竜門社編 [1959a] 『洪沢栄一伝記資料 第二五巻』洪沢栄一伝記資料刊行会。

洪沢青淵記念財団竜門社編 [1959b] 『洪沢栄一伝記資料 第二六巻』洪沢栄一伝記資料刊行会。

洪沢青淵記念財団竜門社編 [1959c] 『洪沢栄一伝記資料 第二七巻』洪沢栄一伝記資料刊行会。

洪沢青淵記念財団竜門社編 [1961] 『洪沢栄一伝記資料 第二九巻』洪沢栄一伝記資料刊行会。

洪沢青淵記念財団竜門社編 [1962a] 『洪沢栄一伝記資料 第四一巻』洪沢栄一伝記資料刊行会。

洪沢青淵記念財団竜門社編 [1962b] 『洪沢栄一伝記資料 第四四巻』洪沢栄一伝記資料刊行会。

洪沢青淵記念財団竜門社編 [1962c] 『洪沢栄一伝記資料 第四五巻』洪沢栄一伝記資料刊行会。

洪沢青淵記念財団竜門社編 [1962d] 『洪沢栄一伝記資料 第四六巻』洪沢栄一伝記資料刊行会。

- 洪沢青淵記念財団竜門社編 [1963] 『洪沢栄一伝記資料 第五〇巻』 洪沢栄一伝記資料刊行会。
- 洪沢青淵記念財団竜門社編 [1968] 『洪沢栄一伝記資料 別巻第五』 洪沢栄一伝記資料刊行会。
- 洪沢青淵記念財団竜門社編 [1986] 『洪沢栄一訓言集』 国書刊行会。
- 洪沢秀雄 [2020] 『父 洪沢栄一』 実業之日本社文庫。
- 島田虔次 [1967] 『大学・中庸（新訂 中国古典選 第四卷）』 朝日新聞社。
- 島田昌和 [2007] 『洪沢栄一の企業者活動の研究―戦前期企業システムの創出と出資者経営者の役割―』 日本経済評論社。
- 島田昌和 [2011] 『洪沢栄一―社会企業家の先駆者―』 岩波新書。
- 島田昌和 [2023] 『洪沢栄一の経営者ネットワーク分析―関連上位経営者たちとの関係性―』 『洪沢研究』 第三五号、二五～四二頁。
- 島田昌和編 [2014] 『原典でよむ 洪沢栄一のメッセージ』 岩波書店。
- 清水洋 [2022] 『アントレプレナーシップ』 有斐閣。
- 杉山里枝 [2021] 『洪沢栄一の社会事業と現在のSDGs、ESGの考え方への萌芽』 『月刊資本市場』 一二月号（四三五号）、三九～四七頁。
- A・スミス [2000a] 『国富論（一）』（水田洋監訳・杉山忠平訳） 岩波文庫。
- A・スミス [2000a] 『国富論（二）』（水田洋監訳・杉山忠平訳） 岩波文庫。
- A・スミス [2000b] 『国富論（一）』（水田洋監訳・杉山忠平訳） 岩波文庫。
- A・スミス [2003] 『道徳感情論（上）』（水田洋訳） 岩波文庫。
- 竹内照夫 [1979] 『新釈漢文大系 第二九巻 礼記（下）』 明治書院。
- 竹内照夫 [2000] 『四書五経入門―中国思想の形成と展開―』 平凡社ライブラリー。
- 武田晴人 [2021] 『ミネルヴァ日本評伝選 洪沢栄一―よく集め、よく施された―』 ミネルヴァ書房。

田中一弘 [2013] 「道德経済合一説の真意―東京高等商業学校での講話から―」橋川武郎・島田昌和・田中一弘 編著『洪沢栄一と人づくり』有斐閣。

田中一弘 [2014a] 「道德経済合一説―合本主義のよりどころ―」P・フリデンソン／橋川武郎編著『グローバル資本主義の中の洪沢栄一―合本キャピタリズムとモラル―』東洋経済新報社。

田中一弘 [2014b] 「良心」から企業統治を考える―日本の経営の倫理―』東洋経済新報社。

田中一弘 [2017] 「洪沢栄一の道德経済合一説からみたフィロソフィとアメーバ経営―公益と私利の両立をめぐる―」アメーバ経営学術研究会編『アメーバ経営の進化―理論と実践―』中央経済社。

田中一弘 [2020a] 「論語と算盤」と『資本主義の再定義』―経営の責任としての公益追求―』『月刊監査役』四月号(七〇八号)、二二―三八頁。

田中一弘 [2020b] 「経営者の誠実さとガバナンス改革」『経営行動研究年報』第二十九号、二八―三三頁。

田中一弘 [2022] 「稲盛哲学と〈誠実さ〉―「正直」の観点から―」『稲盛和夫研究』第一号、一九―三六頁。

田中一弘 [2024] 「研究報告②『フィロソフィの根底にあるもの』(第三回稲盛和夫研究会・第八回アメーバ経営学術研究会シンポジウム「稲盛和夫の経営理念とアメーバ経営―その起源と現代的意義―)」『稲盛和夫研究』第三号、九九―一〇八頁。

玉手慎太郎 [2023] 「強い制度志向と倫理のアウトソーシング」『現代思想』一月号、八―一六頁。

長幸男 [1984] 「解説」洪沢栄一述、長幸男校注『雨夜譚―洪沢栄一自伝―』岩波文庫。

土田健次郎 [2011] 『儒教入門』東京大学出版会。

土田健次郎 [2012] 『日常』の回復―江戸儒学の「仁」の思想に学ぶ―』早稲田大学ブックレット。

土屋喬雄 [2002] 『日本経営理念史』麗澤大学出版会。

堂目卓生 [2008] 『アダム・スミース―「道德感情論」と「国富論」の世界―』中公新書。

- 土光敏夫著・本郷孝信編 [1996] 『新訂・経営の行動指針』産業能率大学出版部。
- P・F・ドラッカー [1974] 『マネジメント (上)』—課題・責任・実践— (野田一夫・村上恒夫監訳) ダイヤモンド社。
- P・F・ドラッカー [2008] 『マネジメント (上)』—課題、責任、実践— (上田惇生訳) ダイヤモンド社。
- 西沢保 [2007] 『騎士道の精神、経済社会に』 (経済教室) 『日本経済新聞』八月二五日付。
- 新渡戸稲造 [2008] 『武士道』 (矢内原忠雄訳) 岩波文庫。
- 日本経済調査協議会 [2006] 『お天道様に恥じない経営—日本企業のガバナンスと社会的責任—』 (調査報告 2006-1)。
- 根井雅弘 [1995] 『二十世紀の経済学—古典から現代へ—』講談社学術文庫。
- C・I・バーナード [1968] 『新訳 経営者の役割』 (山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳) ダイヤモンド社。
- 一橋大学学園史刊行委員会編 [1985] 『一橋大学百二十年史—Captain of Industryをいえる—』一橋大学。
- C・ヒルティ [1962] 『幸福論 第二部』 (草間平作・大和邦太郎訳) 岩波文庫。
- 福沢諭吉 [2002] 『瘦我慢の説』『福澤諭吉著作集 第九卷 丁丑公論 瘦我慢の説』 (坂本多加雄編) 慶應義塾大学出版会。
- 福田徳三 [1920] 『現代の商業及商人』大鏡閣。
- 藤井専英 [1969] 『新釈漢文大系 第六卷 荀子 (下)』明治書院。
- P・フリデソン／橘川武郎編著 [2014] 『グローバル資本主義の中の渋沢栄一—合本キャピタリズムとモラル—』東洋経済新報社。
- M・フリードマン [2008] 『資本主義と自由』 (村井章子訳) 日経BP社。
- 本田濟 [2006] 『易経講座 上巻』斯文会／明徳出版社。

- 松尾匡 [2009] 『商人道ノス、メ』藤原書店。
- 松下幸之助 [1968] 『道をひらく』PHP研究所。
- 松下幸之助 [1998] 『人生談義』PHP文庫。
- 松下幸之助 [2001] 『実践経営哲学』PHP文庫。
- 松下幸之助 [2009] 『松下幸之助の哲学—いかに生き、いかに栄えるか—』PHP文庫。
- 松山直樹 [2014] 『A・マーシャルにおける経済騎士道と公正賃金』『経済学史研究』第五五卷二号、五四〜七二頁。
- 三島毅 (中洲) [1886] 『義利合一論』『東京学士会院雑誌』第八篇之五。
- 三島毅 (中洲) [1907] 『道德経済合一説』(三島中洲講演 明治四〇年十一月)、渋沢青淵記念財団竜門社編 [1962a] 『渋沢栄一伝記資料 第四一巻』渋沢栄一伝記資料刊行会、四二二〜四二五頁。
- 三島毅 (中洲) [1909] 『中洲講話』文華堂。
- 三島毅 (中洲) [1919] 『三島毅碑銘』『斯文』第一編第四号。
- 三島正明 [1998] 『最後の儒者—三島中洲—』明德出版社。
- 水口拓寿 [2022] 『中国倫理思想の考え方』山川出版社。
- 宮本又郎編著 [2016] 『日本の企業家— 渋沢栄一— 日本近代の扉を開いた財界リーダー—』PHP研究所。
- 守屋淳 [2020] 『渋沢栄一— 論語と算盤— の思想入門』NHK出版新書。
- 諸橋轍次 [1973] 『論語の講義 新装版』大修館書店。
- 諸橋轍次 [1977] 『義に就て』『諸橋轍次著作集 第三卷』(鎌田正・米山寅太郎編集) 大修館書店。
- 諸橋轍次 [1989] 『諸橋轍次選書三 孟子の話』大修館書店。
- 八木誠一 [2009] 『イエスの宗教』岩波書店。

- 安岡正篤 [1960] 『易学入門』 明德出版社。
- 山鹿素行 [1983] 「山鹿語類(抄)」 田原嗣郎責任編集『日本の名著12 山鹿素行』 中央公論社。
- 吉田賢抗 [1960] 『新釈漢文大系 第一卷 論語』 明治書院。
- J・ラスキン [1971] 「この最後の者にも」(飯塚一郎訳) 五島茂責任編集『世界の名著41 ラスキン モリス』 中央公論社。
- 李退溪 [2015] 『自省録』(難波征男校注) (東洋文庫) 平凡社。
- 竜門社 [1937] 『青淵先生演説撰集(竜門雑誌第五百九十号附録)』 竜門社。
- 渡辺和子 [2013] 『面倒だから、しよ』 幻冬舎。
- 和辻哲郎 [2007] 『倫理学(一)』 岩波文庫。
- Carlyle, T. [1843] *Past and Present*. In *The Works of Thomas Carlyle*, Vol. X, 1969, edited by H. D. Traill. AMS Press.
- Ford, H. [1922] *My Life and Work*. William Heinemann.
- Ford, H. [1929] *My Philosophy of Industry*. Coward-McCann.
- Friedman, M. [1970] 'The social responsibility of business is to increase its profits.' *New York Times Magazine*, September 13.
- Koehn, D. [2001] *Local Insights, Global Ethics for Business*. Rodopi.
- Marshall, A. [1907] 'The social possibilities of economic chivalry.' *The Economic Journal*, 17 (65), 7-29.
- Nitobe, I. [1969] *Bushido: The Soul of Japan*. Charles E. Tuttle Company.
- Porter, M. E. and M. R. Kramer [2006] 'Strategy and society: The link between competitive advantage and

- corporate social responsibility. *Harvard Business Review*, 84(12), 78–92.
- Porter, M. E. and M. R. Kramer [2011] Creating shared value: How to reinvent capitalism and unleash a wave of innovation and growth. *Harvard Business Review*, 89(1-2), 1–17.
- Tanaka, K. [2017] Harmony between morality and economy. In P. Fridenson and T. Kikkawa (Eds), *Ethical Capitalism: Shibusawa Eiichi and Business Leadership in Global Perspective* (pp.35–58). University of Toronto Press.
- Tanaka, K. [2020] Prioritizing public interest: The essence of Shibusawa's doctrine and its implications for the re-invention of capitalism. *Hirotsubashi Journal of Commerce and Management*, 53(1), 1–19.
- Vogel, D. [2005] *The Market for Virtue: The Potential and Limits of Corporate Social Responsibility*. Brookings Institution Press. (邦訳版「企業の社会的責任(CSR)の徹底研究：利益の追求と美徳のバランス」の事例による検証」(小松由紀子・村上美智子・田村勝省訳)一灯舎, 二〇〇七年)。

あとがき

洪沢栄一は、私が奉職する一橋大学の大人である。前身である商法講習所の時代から学校運営に深く関与して、この学校が一再ならず直面した存亡の危機を救い、一九二〇年に東京高等商業学校が大学に昇格して東京商科大学（現、一橋大学）となるに至るまで強力に支援し続けてくれたのが洪沢であった。こうした本学とのつながりに加え、私自身、儒学を活かした経営哲学を研究テーマの一つとしてきたことから、「論語と算盤」の洪沢栄一には早くから関心をひかれていた。

その私が洪沢の道徳経済合一思想の研究に本格的に携わるようになったのは、二〇一〇年代前半に実施された二つの共同研究プロジェクトに参画してからである。一つは一橋大学大学院商学研究科（当時）のグローバルCOEプログラム《日本企業のイノベーション》の下で行われた「洪沢栄一プロジェクト」、もう一つは公益財団法人洪沢栄一記念財団が組織した「合本主義研究プロジェクト」である。それぞれの成果は前者が『洪沢栄一と人づくり』（有斐閣、二〇一三年）、後者が『グローバル資本主義の中の洪沢栄一』（東洋経済新報社、二〇一四年）および*Ethical Capitalism: Shiwawa Eiichi and Business Leadership in Global Perspective* (University of Toronto Press, 2017) に結実している。

本書の初めの方で提示した道徳経済合一説の論理構造や、そのエッセンスとしての公益第一・私利第二は、すでにその時点で明らかになっていた。本書ではそれを起点として、公益第一・私利第二を「先義後利」に押し広げて、洪沢が真に求めた「道徳と経済を合一させる道」の探究をさらに進めた。併せて、洪沢と現代の接点にも目を向け、ESG/SDGs経営やコーポレート・ガバナンス、これからの資本主義のあり方などに対する示唆についても論及した。できる限り洪沢の言説・思想に基づく根拠を示して論じることができた一方で、洪沢に抛りつつ私自身の考えを述べたところも少なくない。また、私は儒学の専門研究者でもない。中には行き過ぎた主張や理解不足、思わぬ誤解があるかもしれない。諸賢のご叱正を願うものである。

ところで、洪沢が真に求めた「道徳と経済を合一させる道」のことを本書では「経済士道」と呼んだ。敢えてこのような名称を用いずとも、先義後利の意味（第3章）、公への奉仕、誠実、勇気という三つの義（第5章）、王道と霸道の区別（第6章）を理解しさえすれば、洪沢の「経営哲学」を知り、現代の我々がそれを活かす手がかりを知るには十分かもしれない。それにも拘わらず、一つの章（第4章）を設けて「経済士道」を論じ、これを本書の副題にまで掲げたのには理由がある。本文で述べたように、洪沢自身が「武士道は即ち実業道なり」と考えていたこと、先義後利の企業者として「戦う」必要がありそれを明示する狙いがあること、そして先義後利が個人の価値観ひいては生き方——道——に関わるということ。殊に最後の点に関連して、これに加えて強調しておく

べきは、「先義後利は実行しなければ意味がない」から、である。

幕末、江戸城無血開城への道を開いた幕臣・山岡鉄舟が、明治になって武士道の眼目についてこう語っている。「まず、世人が人を教えるに、忠・仁・義・礼・知・信とか、節義・勇武・廉恥とか、(……)言いかえれば種々あつて、これらの道を実践躬行する人をすなわち、武士道を守る人というのである」(勝部真長編『山岡鉄舟の武士道』角川ソフィア文庫、二九頁)。徳目が何であれ、それを実践躬行すること、もつと言えはその人の実際の行いがそれらの徳目の現れになっていることが、それが武士道の武士道たる所以である——私はそのように理解している。

「先義後利」という一種の徳目を自身・自社の哲学・理念として謳うことは難しくはない。しかしそれを実行しないことには「士道」にはならない。このことを、自戒も込めて記しておきたい。「先義後利の経営」を実行すること、実行し続けることが「洪沢栄一が求めた経済士道」である。

先述の通り本書の起点となり、また本書の議論全体の礎ともなったのは、二〇一〇年代前半の二つの共同研究プロジェクトである。とりわけ日米英仏の八名の研究者がメンバーとなって進められた「合本主義研究プロジェクト」では、経営史学の領域でいずれも立派な業績をあげてこられた先生方との間で、毎回、知的刺激に満ちた議論をする機会に恵まれた。ロンドン、ボストン、パリ、東京などで開かれた研究会では、洪沢における公益と私利の関係についてもたびたび熱い議論が交わされ、そのたびごとに道徳経済合一に対する私の理解は磨き直されていった。研究者として、ま

ことに心躍る経験であった。メンバーであった先生方に、この場を借りて深く感謝申し上げたい。中でも橋川武郎先生と島田昌和先生には「合本プロジェクト」のみならず、グローバルCOEプログラム「洪沢栄一プロジェクト」でもお世話になった。そもそも両プロジェクトへの参加を誘い、私の洪沢研究への道を開いてくださったのが橋川先生である。プロジェクトの研究成果の発信に向けても絶えず背中を押ししてください、研究者として場数を踏むことの大切さも教えていただいた。洪沢研究の第一人者である島田先生には、両プロジェクト終了後も、共著論文の執筆などを通じて多くのことを教えていただいている。本書の主張のいくつかについて賛意を示してくださいったことが、執筆を進めるにあたって大いに励みとなり力となった。

公益財団法人洪沢栄一記念財団にも厚く御礼を申し上げます。「合本主義研究プロジェクト」というこの上ない機会を与えていただき、その研究プロセスにおいても、成果発信にあたって、惜しめない支援を賜った。同財団にはグローバルCOEプログラム「洪沢栄一プロジェクト」でも側面からサポートをいただいた。両プロジェクトに当時、同財団の研究部部长として携わられた木村昌人先生に謝意を表する次第である。さらに、本書の執筆過程では、同財団情報資源センターのスタッフの方々から貴重なご教示・ご協力を得た。ここに記して感謝したい。

本書はまた、本書で言うところの「企業者」の方々にも負うところも大である。一橋大学大学院経営管理研究科（一橋ビジネススクール）のMBAコースで私が担当している「経営哲学」の授業、そ

して一橋シニアエグゼクティブ・プログラム（HSEEP）の受講者の皆さんとの議論や提出された課題レポートから、多くの気づきと知見、刺激をいただいた。また、HSEEPのゲスト講師の方々をはじめ幾人もの経営者から、貴重なご経験、ご自身の哲学を伺うことを通じて、多くを教えてくださいいただいた。このほか、企業研修や講演会の参加者とのやりとり、フィードバックからも様々な学びを得た。こうした企業者の皆さんの存在が、この本を書き切る原動力となった。感謝申し上げます次第である。

本書の出版にあたっては有斐閣書籍編集第二部の藤田裕子さんと得地道代さんに大変お世話になった。古い言葉の引用や注記がふんだんにある本書の編集・製作には相当なご苦勞をおかけしたことを思う。心から御礼を申し上げます。

二〇二四年六月 新日本銀行券の発行を翌月に控えて

田中 一弘

付記 本書は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号 20K01877）の成果の一部である。

著者紹介 田中 一弘 (たなか かずひろ)

一橋大学大学院経営管理研究科・商学部教授

1990年一橋大学商学部卒業。1999年一橋大学大学院商学研究科博士後期課程修了。博士(商学)。神戸大学大学院経営学研究科助教授、一橋大学大学院商学研究科准教授などを経て、2018年より現職。専門は経営哲学、企業統治。

主な著作：『「良心」から企業統治を考える』(東洋経済新報社、2014年)、『渋沢栄一と人づくり』(共編著、有斐閣、2013年)、『企業統治』(共著、中央経済社、2017年)。

先義後利の経営——渋沢栄一が求めた経済士道

Responsibility Ahead of Profit: Economic Chivalry of Shibusawa Eiichi

2024年7月30日 初版第1刷発行

著者 田中一弘

発行者 江草貞治

発行所 株式会社有斐閣

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17

<https://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷 株式会社精興社

製本 牧製本印刷株式会社

装丁印刷 株式会社享有堂印刷所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

©2024, Kazuhiro Tanaka.

Printed in Japan. ISBN 978-4-641-16633-2

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

JCOPY 本書の無断複製(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつと事前に、(一社)出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mailinfo@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。